鉄砲洲神社　論語素読　解説

（平成 21 年 11 月 13 日）

八佾第三

４　林放（りんぽう）礼（れい）の本（もと）を問（と）う。子曰（しいわ）く、大（だい）なるかな問（と）うこと。
礼（れい）は其（そ）の奢（おご）らんよりは寧（むし）ろ倹（けん）なれ。喪（そう）は其（そ）の易（おさ）まらんよりは寧（むし）ろ戚（いた）めと。

林放が礼の根本を孔子に聞きました。

孔子が言うには、「この質問はとても大きな質問で、非常に良いことだ。氣持ちよく答えよう。礼は贅沢よりはむしろ、慎ましやかであった方がよい。葬儀は、滞りなく進むようにルール通り行なうのは、あまり良いものではない。坦々と滞りなく進むよりは、哀悼の情がこもるようにしなさい。」

実は、ここにも何度かお邪魔して一緒に吟を致しました舘野先生が亡くなりまして、本日が告別式でした。先生は川中島が好きで、朝稽古でいつもやっておりましたので、弔辞で哀悼の心を込めて「川中島」を吟じさせて戴きました。

５　子曰（しいわ）く、夷狄（いてき）の君有（きみあ）るは、諸夏（しょか）の亡（な）きが如（ごと）くならざるなり。

夷狄とは、軽蔑している野蛮な国という意味です。

孔子が言うには、「野蛮な国でさえ中心人物（君子）がいれば、乱れている中国よりははるかに良い。」

孔子が、自分のいる魯の国について、野蛮人の国でもトップがきちんといるのに、我々の国はいないではないかと嘆いています。

現代の組織や会社で当てはめてみればよいでしょう。例えば、今話題になっているＪＡＬに中心人物がいれば、あんなに酷い事にはならないでしょう。心太で次から次に社長が決まって、年金もどんどん増えていてメスも入れられないのですから、危機管理の何もあったものではないと思います。

どういう組織体でも、中心人物がいるかいないかで、まるで変わるということです。仮に中心人物がいなければ、中心人物を生み出さなければその組織は終ります。

6　季氏 泰山に　旅　せんとす。子 冉有に謂いて曰く、女 救うこと能わざるかと。対えて曰く、能わずと。子曰く、嗚呼、曾 ち泰山は林放に如かずと謂えるかと。

魯の国の泰山の大きなお祭で、本来は君主が中心となってお祭りするべきものであるのに、家老職にある季氏が主催して行なったわけです。それは非常に増長していることです。冉有は孔子の弟子で、季氏の家老をやっています。

孔子が弟子に向って、「お前は季氏の家老なのだから、何で中止させれられなかったのか」と詰問したところ、冉有が「それは出来ません」と答えました。

孔子が、「泰山というものは自然神なので、礼にはずれたお祭りを喜んで受けることがあると思うか（そんな事はあり得ない）。人間である林放でさえ、礼について根本的な質問をするくらいだから、神である泰山が人間以下の考え方・行いをすると思うか」と歎息しています。弟子に対して、自分の主人を間違った方向に行かせてはいけないと言っています。

ちなみに今の日本の国の中で考えてみますと、官僚は増長しないが良いと読みました。行政刷新会議がだんだん良いところに入ってきたと思っています。行政刷新会議の中心人物は、菅さんなのか、仙谷さんなのか、はたまた財務省なのでしょうか。どうも仙谷さんが中心人物になりつつあるなと思います。独立行政法人なるものが増長し過ぎていて、お金をしこたま溜め込んでいます。それを今、吐き出させようと行政刷新会議が進めています。中心になるものがどんどん進めていけば、家臣である官僚、独立行政法人で増長したところにかなりメスが入って、お金が生み出されるかもしれないという期待を持ちました。

本日は以上です。有難うございました。